

# 女の新聞

クワッサン

10日・25日の月2回発行

## 日常生活の中の差別 242

### 不登校という選択②

# 新聞の制作を通じ、自分をみつめ、自己肯定感を取り戻してゆく。

## 奥地圭子さん

おくち・けいこ NPO法人全国不登校新聞社代表理事

## 石井志昂さん

いしゐ・しやうこう 「Fonte」(不登校新聞)編集長

不登校やひきこもりの子ども、その親に取材し、当事者や親同士をつないでいる日本唯一の新聞がある。'98年に『不登校新聞』として創刊し、昨秋、通算300号を迎えた「Fonte」(04年に改名、「源流から」の意)だ。

今、全国で不登校の状態になっている小中学生の人数は12万人以上(09年度文科省調査)。いじめ、教師との関係悪化、学業不振など、「学校」という場所・制度に生きづらさを感じる子

どもたちが全国に数多くいるのは前号で伝えたとおり。

「いじめをしていた者がいつの間にか、いじめられる側に回る。矛先が自分分に向くか分からない。殺伐とした空気がいつもどこかに潜んでいる。そんなクラスには戻りたくない、といった声は昔も今も変わりません」

と、編集長の石井志昂さん。この新聞を発行するNPO全国不登校新聞社の奥地圭子さんは言う。

「そうした不登校の当事者の視点を反映させた読者参加型の紙面づくりを編集方針にしました。新聞を通じて、世の中の不登校に対する偏見や無理解、国の教育制度を変えていきたいという思いで発行し続けたのです」

新聞は、タブロイド判8ページで月2回発行。紙面では人気なのは不登校の子どもや経験者の「子ども若者編集部」による著名人へのインタビューコーナーである。「子ども

若者編集部」には、15歳〜20代半ばの若者が総勢60名いる。

各編集部員が「自分の魂に触れた人」を取材候補として挙げる。かつて、編集部員の一人が、評論家の吉本隆明さんを何者か知らないまま「このおじさん、すくいいことを言っている」と取材を申し込んで実現したこともある。

### 取材を通して自分と向き合う。

「取材前の会議で編集部員各自が、これまでの自分の人生を振り返り、取材相手に何を聞きたいのか、質問内容を一生懸命に考えます」(石井さん) 300号では、漫画家の西原理恵子さん、作家・イラストレーターのリリー・フランキーさんという大物二人へ

のインタビューが、それぞれ2ページにわたって掲載されていた。例えば、インタビューアの若者は、リリーさんに対して、学校や世の中への違和感を織り交ぜた切実な問いを繰り返す。リリーさんも、「小中高とつねに学校には行きたくなかったです」「(大学を)卒業してから5年間はなんにもしてませんでした」と告白。「(不登校やひきこもりになっても、自分なりの美意識を持つていれば)自然と外へ出ることも働くこともなんでもなくなると思

います。それに、その時間が糧になるときが来ますから」と励ます。100号記念号で美術家の横尾忠則さんが登場した時、取材にかけた10人近くの「子ども若者編集部」スタッフに、「一番大切なのは直感を信じて」と、不登校を選んだ者へ温かいメッセージをくれたそう。

「子どもの力になれるのなら」と取材を快諾する著名人は多いという。編集長の石井さんは現在28歳。中学2年から不登校となり、その後この新聞の編集に関わり、「子ども若者編集部」にも属していた。「無理にでも不登校を肯定してほしいとは思っていません。でも、様々な経験をしてきた著名人の皆さんは、不登

### ●あなたはこの意見をどう思いますか。

不登校の子どもや親は、悩みを抱えたまま

誰にも相談できず、孤立しているのではないか。

何らかの形で社会との繋がりがなければ、

子どもも親も、自信を失ってしまうのでは。

1941年生まれ。現職のほか、東京ニューレ理事長、NPOフリースクール全国ネットワーク代表理事も兼職。「不登校という生き方」(NHK出版)など著書多数。



1982年生まれ。中学2年の頃から不登校になり始め、「不登校新聞」の編集にも参加して取材活動を開始。'06年、前任者を引き継ぎ、二代目の編集長となった。



校のような経験に共感してくれます。

その答えのひとつひとつに編集部員も心が救われ、勇気をもらい、無事取材できたことに言葉にならないような充実感を覚えます。高校、大学、社会人というルートははずれたため、自分ひとりで生きていく自信が持てず、自己評価も低くなりがちな不登校の若者にとつて、紙面でのインタビューを完成させるプロセスそのものが、人間形成に大いに役立っているのです」

奥地さんによれば、新聞の発行数は活字離れの影響でピーク時(約6000部)の3分の1程度だ。ただし、過去の記事を一部公開しているネット版には年間4万人以上のアクセスがある。「不登校専門紙」に寄せられる信頼は今も変わらず高い。



「Fonte」(フォンテ)の購読料は4,800円(6カ月)。過去新聞の閲覧・購読申し込みは <http://www.fonte.org/>。

●現代の日本では差別はあってはならないことです。しかし残念なことに、私たちが気付かないところに差別の実態は存在しています。日常生活の中の差別について共に考えていくために、読者の皆さんの意見や体験談を募ります。クワッサン編集部/女の新聞係まで、手紙をお寄せください。(FAXは不可とさせていただきます)